

第七講 前期青銅器時代のギリシア

レポート課題：新石器時代との不連続面をどの様に評価するのか

連続面：文化的連続性を認める事ができる

墓地：新石器時代との連続性・・・集落内の土坑墓

石室墓、石郭墓・・・・・・・・集落外にあり家族墓としての性格

青銅：新石器時代に既に出現している。

それほど重要ではない。

建築面におけるメガロン構造

前期青銅器時代 I 前 3600～2900 年頃

クレタ島に頸部に取っ手のついた小型の注口土器・カリケーと呼ばれる高脚台付き盃の出現・・・赤地に白、ないしベージュ地に褐色で彩色。

ギリシア南部の急速な発展

メッセニア：180 人／1000 km²→600 人／1000 km²

ラコニア： 85 人／1000 km²→400 人／1000 km²

新石器時代の居住地を放棄

↓

海岸部・・・海辺の丘や半島の上

内陸部・・・平野や丘陵の裾

居住地に周壁を築き、建物の密度は高くなる

墓地・・・新石器時代と連続

集落内の土坑墓が主。

集落外に石室墓や岩窟墓

前期青銅器時代 II 前 2900～2500 年頃

ギリシア本土とキクラデス諸島における舟形ソース入れやフライパン型土器の普及・・・黒地に灰色ないし赤色

クレタ島では注口土器と嘴壺・・・明色地に茶色ないし赤色

住居：

集落の数：急増

ペロポネソス半島 20→74

前期の延長：丘陵部の上に集落

二～三重の周壁・稜堡を有する

巨大な公共建造物

レルナのタイルの家 25m X 12m

末期に破壊

レルナのタイルの家、火災によって失われる

前期青銅器時代 III 前 2500～2100 年頃

前期青銅器時代 III は文化的には中期青銅器時代に属する

理由：最大二～三代しか使用できない教会後陣型家屋の普及、

轆轤の普及

灰色単色のミニュアス式と呼ばれる磨研土器の出現と普及

居住地内埋葬の再発

↓

これらは前期青銅器時代 II の末の完全な破壊によって、レルナ、ティリンス、ズウグリエス、ハギア・マリナ、キッラのような多くの遺跡で先行して現われているので、多くの研究者は新しい民族、「ミニュアス人」とか或いは「原ギリシア人」の到来を示すものとみなして来た

最近の研究はこのような見解を修正して来ている

断絶面はレルナでは非常にはっきりしているが、エギナのコロナやティリンスの下町では非常に僅かであり、地層線は「移行」を雄弁に物語っている

加えて、ラコニアのような幾つかの地方では、このような断絶層の後、前期青銅器時代を特徴付ける痕跡は全く発見されていない

中部ギリシアでは、前期青銅器時代 III の初めの後になって、新しい文化的要素が現われている。

中部ギリシアでは、前期青銅器時代 III の初めの後になって、新しい文化的要素が現われている。

二種類の飲料用の器：「ウーズ用カップ」と「タンカルド」（又は「トロイの茶碗」）

特徴：原ミニュアス式土器の出現の他に、形態と技術の大きな多様化、地域特性の分化（前期青銅器時代Ⅱと対称的）

アドリア式土器：前面、線刻に覆われた内地産土器

白色の線刻ないしは押紋土器・・・アルゴリス、コリントス、エーリスに認められる

↑

ルーマニア、ないしはトラキア、ないしはダルマティア、といったバルカン半島諸地域で製作された



図1 嘴壺（中井 1998年）



図2 ソースボート型土器（中井 1998年）



図3 フライパン型土器（中井 1998年）



図4 ハープを引く人（中井 1998年）



図5 アウロスを吹く人（中井）